

(3) 研究者から見た研究費の制度上の問題による 研究に対する非効率・非効果的な事例

大学・職位	研究資金名	非効率・非効果的と感じた点
特定研発・研究員	JST さきがけ (代表)	国際学会での講演依頼を複数受けた。国際学会での招待講演はこれからの応募業績としての評価が比較的高いので受諾を希望したが、その年度の旅費はほぼ消化してしまっていたため旅費が確保できず、仕方なく依頼を辞退した。日本の会計年度末に当たる2、3月頃に国際学会の講演依頼を受けることもあるため、急な講演依頼であっても予算のやりくりが高い自由度でできれば、評価が得られる発表機会を積極的に活用できる。
RU11・准教授	NEDO (代表)	研究目的達成に必要な装置の購入に当たり、予算配分の都合から形式的に2年に分割して発注・納品せざるを得ず、研究が実質半年以上遅れた。予算執行は実情に対応したものとすることが望ましいと思われる。
RU11・教授	科研費特別推進 (代表)	年度途中で約1500万円の実験装置の購入が必要となった。しかし、正式発注までの仕様策定や公開見積合わせ等の学内での事務手続きに約2ヶ月、さらに装置の納期が約3ヶ月のため、年度内での納品が危うく、年度内での購入を断念し次年度での購入となった。さらに、仕様策定等の事務手続き自体も次年度から開始する必要があったため、 約半年遅れることとなった。
国立大A・准教授	科研費基盤B (代表)	測定機器（1000万円強）をその予算の中に盛り込んだ。その申請は採択されたが、採択時に申請時の予算から減額された影響で、単年度での購入が不可能となってしまった。そのため、単年度の予算に収まるように、その測定機器の本体のみを購入し、重要なオプションは次年度の予算で購入することになった。これが、研究を迅速に進める上での大きな障害となった。

*個人の特定に繋がらないよう、大学名、研究年度、総額は省略

大学・職位	研究資金名	非効率・非効果的と感じた点
RU11・教授	科研費基盤S (代表)	<p>予定より進んだので前倒しをした。前倒しの手続きは8月と11月だったかに行う機会があるが、結果が出るまで2-3ヶ月はかかる。従って、前倒しの申請までの期間と申請後、一定期間は待たなくてはならず、前倒しという仕組みがあってもかなり遅れるのは事実。今も手続きをして待機中。その間に円安になって更に困る事態になる可能性がある。</p>
RU11・准教授	科研費基盤B (代表)	<p>事務側が基金分と補助金に当該の科研予算を勝手に分けられてしまい、学生のRA費用の支払い時に、合算できないようなことを大学側から言われ（ローカルルール?）、困ったことがある。当初は補助金の枠で雇用していたのですが、年度末になり、残額が不足してきたため、基金に切り替えようしたら、事務担当者から「合算はできない、切り替えには1ヶ月前の何日かに手続きが済んでいないとダメ」と言われて、結局、打ち切りということで学生たちには納得してもらった。</p>
RU11・教授	科研費基盤B (代表)	<p>研究の予想外の進捗にともない、新規な機器の購入を必要としたが当該研究費で割り当てられている単年度の総額では購入が困難であった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・当該研究の論文が年度末である3月にインパクトファクターの高い雑誌に採択された際に、その論文内容が非常に高く評価されて「雑誌表紙に取り上げて良い」との連絡を編集者から受けた。しかし雑誌表紙としての印刷費（約30万円）を支払うための研究経費が年度末であるためにすでになく、あきらめざるを得なかった。論文が採択される次期が3月ではなく、2月あるいは4月と少し次期がずれていれば、問題なく支払える金額であったために、非常に残念であった。日本の良い研究の成果発表の機会が失われることとなった。

大学・職位	研究資金名	非効率・非効果的と感じた点
RU11・准教授	科研費基盤A (代表)	一律8xとか7xとかされてしまうので、初年度計画してた装置購入を直ぐに進める事ができず、 2年間に亘っての購入になり、1年遅れる結果 となった。基金であれば、問題が解消され、研究をより効率的・効果的に進めれる。
RU11・准教授	科研費若手A (代表)	基金と補助金が混在。補助金で買う予定にしていた、国内在庫がなく輸入になっていた試薬が年度内に納品される予定であったが、間に合わないことが年度末のぎりぎりに判明した。そのため、会計年度の締めに関に合わせるために、補助金で代わりにグレードの低い国内在庫がある試薬を購入する必要が生じた。 全部基金になっていれば、納期を気にせずに研究に一番役に立つ試薬の納期を待つことができ、より効果的に研究費を使うことができた。 全部基金の方が研究費を有効に活用できる。
RU11・准教授	文科省新学術 (代表) 民間共同研究費 (代表)	それぞれの研究費で購入した装置をドッキングすることで、 それぞれの研究が想定以上かつ加速的に進めることができるのに、同時に進んでいるため目的外使用に当たると言われ、ドッキングできず、 民間共同研究が終了してから装置をドッキングした飛躍的に成果が上がったが、 半年以上待たなければならなかった。 研究の想定外の発展を大きく阻害しており基金化と並んで併用化も検討していただきたい。

大学・職位	研究資金名	非効率・非効果的と感じた点
RU11・准教授	科研費若手A (代表)	<p>直接経費のうち、500万円が基金、残りが補助金として交付された。基金は研究の進捗状況に合わせて予算を使用しやすいというメリットがあるが、比較的高額な装置を導入した際、補助金と基金を合わせて使用する必要が生じた結果、学内での手続きが煩雑になり、納品が数ヶ月遅れた。また、基金と補助金の使用状況を常に気にしながら研究を進めなくてはならない点も返って不便に感じた。同一予算の一部が補助金となる状況は効率が良くないと考える。</p>
RU11・准教授	科研費基盤B (代表)	<p>補助金の配分額は1年目が総額の半分以上を占めるという傾斜型であり、研究に進展が見られる2,3年目の配分額が少ない。1年目は予算を消化するため、年度末に各種に消耗品（重溶媒、高価なガラス器具やガスボンベ）を大量購入した。</p> <p>研究の進展により2年目の後半に約700万円の実験装置の購入を検討したが残額が少なく、たとえ繰り越して3年目とあわせても少し足りないので、購入は断念した。総額からすればその実験装置は問題なく購入できたはずで、年度にとらわれずに補助金を使用できたならば、研究の進捗状況に応じてより計画的に予算を執行できた。</p>

*個人の特定に繋がらないよう、大学名、研究年度、総額は省略

大学・職位	研究資金名	非効率・非効果的と感じた点
国立大B・准教授	科研費基盤A (分担)	<p>年度末に十数万が残り、消化する必要に迫られた。すぐに利用する予定はないが、将来的に使用する見込みであった消耗品を駆け込みで購入した。本件に限らず補助金全般に言えることであるが、少額の残額でも簡単に翌年度に回せれば、予算をより効果的に活用できると感じる。繰り越し手続きは比較的簡単であるとはいえ、実際は所属機関の事務が難色を示すこともあり、繰り越し手続きを躊躇したこともある。</p>
RU11・准教授	科研費基盤B (代表)	<p>基金のローカルルールで前倒しに関わる事例を挙げる。業者に抗体を作ってもらったとき、費用として30万程度の話。当初、年度内納品がぎりぎりだったので、前倒しせず翌年で支払う計画を立てた。発注したのが12月で、抗体作製には3,4ヶ月はかかるのが通例。ところが、年度内2月末か3月頭にでき上がって納品可能となった。免疫は動物相手なので予想できない。前倒し請求していなかったため、予算がほとんどなく、それで、事務に通常の科研費の執行と同様、入金されるまで立替で払ってもらえないかと聞いたところ、駄目という回答であった。学振に聞いたところ、基金であれば期間中は自由な執行を認めているので、それは問題ないという回答をもって、再度事務に問い合わせたところ、学振ルールはそうであっても、大学として認めていないということであった。すぐにも使えるものが、ローカルルールのために、研究を数ヶ月遅らせる結果となった。</p>

*個人の特定に繋がらないよう、大学名、研究年度、総額は省略

(1) 繰越手続きが非常に面倒

- ☞ 対財務省への説明関係書類に一字一句修正が入る
- ☞ 繰越額を一度返還する必要があり、翌年度に入金後執行可能

(2) 単年度会計で年度をまたいだ執行が出来ない。

- ☞ 継続課題であっても、原則交付内定前の執行は不可
例：H27-29年度継続課題で、H28年度に執行を行う場合、交付内定前（H27年度中）の発注が認められない。

(3) 基金と補助金で制度が異なる：取扱を分ける必要がある。

- ☞ 一部基金が最たる例（とにかく複雑で説明に苦慮する）

(1)、(3) 補足資料 ☞ スライド39、40

科学技術イノベーションを生み出す基盤的な力を強化するために

- 👉 ”**効率的かつ効果的な予算執行**を進めていくことを期待”
- 👉 ”**調達の運用改善や研究資金の基金化**等による柔軟かつ機動的な予算執行”

(総合科学技術・イノベーション会議「国力の源泉である基礎研究の充実と科学技術イノベーションの創出に向けて」)



研究現場からの提言

提言①：前倒・繰越手続きの改善など

- 👉 事前承認から事後承認
- 👉 書類の簡素化と承認期間の短縮
- 👉 日本版NSF（基金化）
- 👉 科研費以外の競金および間接経費（省庁間で統一を！）

提言②：1 + 1 > 2（民間資金を含めて研究資金の併用）

- 👉 研究のさらなる発展・予想外の展開

提言③：ローカルルールの廃止

- 👉 研究費の効率的・効果的な執行
- 👉 研究者・事務員および対策費の負担軽減
- 👉 時間の有効活用（Time is Money for National Benefit）

ご清聴ありがとうございました。